叢　談

素人將棋の話

正會員　本　間　德　雄※

飛車を張りさあ王手だと得意の瞬間腕ぎ取る樣な勢で相手に取られてしまふ。「おい待つた。そんな所へ角が利くとは知らなかつた、こゝで飛車を只取られてたまるかい」「よしこれから待たんよ」「うん僕も待つてやらんよ」と云ひながら二、三手パチパチしてゐる間に又待つたつたと來る素人將棋は實に朗らかなものです、京城に起つた實話ですが或る會合の席上例により天狗連の將棋が始つた、何かわいわい云ふてゐるのでよくみる一方に王が二つあり、一方には一つもない、「どうゲで詰め難いと思つた」「いや僕もよ」といふ始末、何でも駒が悪くて不明瞭なため王を金と間違つて取り又張つたものらしい、如何に素人將棋でも、こんなことはめつたにない例ですが將棋程大衆的で愉快なものはない、素人將棋の定義等よく調べたこともないが、新聞での素人將棋大會等の規則書を見ると「將棋を以て生活費の全部又は一部を得る者を除く」とあるから嚴正に云へば、下手でも賭將棋等をやつて生活してゐる者は素人將棋と云へぬ。指し場所により區別すれば宴會將棋、床屋將棋、綠臺將棋等々仲々種類も多いが大體時間に二回又は三回もやる早指しを普通とし、將棋其のものよりも勝負を樂しむ體の指方が多い。

○素人將棋の強さ

實に千差萬別である、假に將棋指を百階級に分つならば上十級が專門棋士で下九十級が素人將棋といふところであらう。同じ初段の免狀を持つてゐる人でも大駒一枚位の差はざらに見受けられるのである。處が專門家になると飛車一枚は名人と初段の違ひである、先年日本素人將棋大會で優勝した長谷川少年は斯界の天才で素人乍ら三段の力は充分なりと折紙附であつた、處が人々の推めで專門棋士として立つことになり最初、初段として附け出されたが、初めの内は成績が良くなかつた、併し天賦のあつた同少年は直ちに3段4段5段と臺進又臺、迫目下棋界の天才兒として將來を嘱望されてゐる、然らば素人の大家と雖も本職の初段にも敵はないといふ結論になりそうであるが、私は然らずと答へたいのである、素人將棋は指すこと自體が樂しみなので勝負に對する考へ方が專門家と違ふのである、此の習慣性のため百手に一手のミステーキが避け難いのは理の當然である、即ち力はあつても勝負には負けるといふ方が適當であらう、從つて單に力から云へば素人でも、4、5段迄なら日本に相當多いと思ふ。新京でも3段どころが4、5人居り、叮寧に指したなら專門棋士の初段位の力量は充分と思ふ人も2、3居る。

要するに素人將棋はなぜ弱いかといふ答としては、叮寧に指さぬから時に落手があるといふ一語でつきると思ふ。長谷川少年の例でもさうである初めの内は實力があつても落手があり、初段にでも負けるといふ始末であつたのである。

次に一般的に現今程將棋熱が勃興し又普遍化され國民の平均的棋力の向上した時代は空前であらう、全く將棋全盛時代である。これといふのも新聞將棋のお蔭である全國津々浦々まで床屋や綠台で土居さんや木村名人の弟子が續出する。67歩、34歩、26歩、84歩と隊伍堂々進出するあたり途中迄は專門家の定跡そのまゝで脇から見たのでは、どんな高段者が指してゐるのかと思ふ位、從つて近來は棒銀等でやつてくる人は殆んど見受けられないやうになつた。中飛車等も流行しなくなつた。

○素人將棋心得の二、三

※ 水力電氣建設局長　滿洲土木學會副會長
工學士

素人と雖も苟くも將棋を指す以上はそれ相當の心得を必要とする、然らざれば自ら棋品を惰したり、又は相手の氣持を惡くする事がある、以下思ひつきの2、3を記して見よう。

1. 持　時　間

素人將棋には持時間のないのが普通であるが、餘りの長考は相手に迷惑をかける、一般に多忙の身、寸暇を割き樂しむのであるから、一手に1時間も二時間も考へられてはたまらぬ、一勝負1時間か1時間半の持時間が丁度手頃と思ふ。時間制限なき將棋は尙時間制限なき試驗の如く實力考査にはならぬと思ふ。

2. 待　つ　た

待つた、待たんでよく喧嘩になることがある。又4、5手先迄もやりなほしてると持駒等持つてゆかれることがある、如何に素人でも待つたは禁物である、併し相手が「待つた」と降伏を申入れた際待たぬは紳士らしくない。成るべくならば自分は「待つた」をせず、相手の待つたは認める體の餘裕がほしいものだ、餘りひどい落手等も相手に注意を與へるべきである、例へば歩は專門棋手ならば直ちに負けになるのであるが、吾々同士では「おいそれは二歩だ」「いやどうも失禮」で事足りるのである。併しこの心掛け一つが專門棋士とやる時等に思はぬ失策をなす因を作るのであるが又已む得ぬことゝ思ふ。

3. 持駒は手中にすべからず

持駒を手にするものが多い、さればこそ「お手の内は」の質問となるのである。持駒を前に正しく曝して置くにも拘らず尙ほ「お手の内は」を繰返す人もあるには困つたものである。持駒は駒台の上に正しく列べて置くべきである。

○將棋問答二、三

日常次の樣な問題でよく質問を受ける

1. 玉將と王將は何れが正しきや

玉將が正しい、古事來歷は別として現在木村名人等も玉將と呼んでゐる、大閤樣は玉將とか王將とか云ふより大將と改めてはどうかと云はれたと、日記に殘されてゐるそうであるが、創造性に富む、大閤樣らしい處が見えて面白い、これを以てしても相當昔よりこの問題はあつたものらしい、一方が王と書いてあるのは區別のためらしい、既に玉が正しいとするならば下手が王をとり上手が玉を取るが禮儀となる。

2. 日本の將棋の起源

將棋は世界中にあるが、方式も種々雜多だ。併し日本將棋程進歩發達したものはない、其の起源については議論もあるやうだが、大體支那からと云ふことに一致してゐる、但し母胎が支那からとしても日本に來てから日本人の趣味と合致する樣、大改良が加へられたものと思ふ。

3. 駒の並べ方

玉將を第一に並べ大駒より順次歩に至るべし、

4. 千　日　手

千日手は引分けとす、但し詰めにかゝつてゐる時は禮儀として四度目に相手方（詰め方）より手を改めるが普通とする。

5. 持　將　棋

引分を原則とす、例外として大駒の持數又は持數に甚しき相違あるときは判定により勝負を定むるものとす。

以　上

滿洲に於ける素人將棋界の最高峰で關根名人時代より鮮滿間の將棋親善として勇名を馳せ同氏の推薦により名人より段位を授けられし棋士も尠くない木村名人來滿の際の棋譜も名局として評判が高い。　編輯部記